
悪魔と契約しちゃいました

ガラクタ・エントツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔と契約しちゃいました

【Nコード】

N5093Y

【作者名】

ガラクタ・エントツ

【あらすじ】

何の因果か、悪魔と契約してしまった主人公が、事件解決に仲間と共に奮闘することになる。

第1章 「呪われた少女」 友人の頼みにより、なぜか学年一の美少女と付き合うことになった主人公。当然、そんな上手い話があるわけがなく・・・

第1話 悪魔と契約しちゃったかもしれない

「本当に、悪魔と契約してしまったかもしれない」

ここで言う悪魔とは別に、高利貸しでもなく、鬼嫁でもない。
文字通り本物の悪魔だ。

帰宅の途中、怪物に襲われて、悪魔に助けてもらったわけでもなく。

朝、目覚めたら、隣に可愛い小悪魔が裸で寝ていたわけでもなく。
別に誰かを恨んでいたわけではなく。世界征服をしたく召喚したわけではなく。

ただ、単純に勢いで、近藤信也は悪魔と契約してしまった。

近藤信也は、自分の手の中にある 아이폰 を見て、そう思った。



美女。それは、遠くから見るもので、自分には縁がないもの。そう思っていた。

彼女。妄想の恋人ならいますが・・・現実にはいません。

恋。片思いならベテランです。

出合い。それは・・・突然にやってきた。

学年一の美少女、水上麗華みなかみれいかが、なぜか僕の目の前に居る。

少女は垂れ目で少々童顔、ストレートロングな髪で清楚なお嬢様

の雰囲気を漂わせていた。

その一方で、出るところは出ているグラマーな体形なので、男子の間での人気は断トツだ。

彼女と今まで一度も話したことがない。というよりも、半径5メートル内に近づいた記憶もない。

そんな彼女が、なぜか、同じ部活の星野守と久保恵に連れられ目の前に居る。

何でも、僕と彼氏彼女の関係になりたいらしい・・・建前上。

なんじゃそれ。

彼女には、変な噂がある。

彼女の彼氏になった男は死ぬ。という噂だ。

第2話 彼女

彼女に初めて彼氏が出来たのは、中2の夏。

同じクラスメートだった。でも、最初の彼氏は、付き合い始めて3週間後、交通事故で死亡。

2年後、高校生1年生になった彼女は他の学校の3年生と付き合い始めた。

でも、その彼氏は、1週間後に行方不明になった。

以前にも家出をしたことがある彼の失踪は、家出ということで、社会的には処理された。

この頃から変な噂が出始めた。

彼女の彼氏になった男は死ぬ。

彼女の美貌と人気に嫉妬した一部の女生徒や彼女に振られた男たちの悪口だった。

しかし、その噂は、悲しみに打ちひしがれた彼女をさらに追い詰めるものだった。

そんな彼女を励まし、救ったのが、昔ながらの幼馴染の少年だった。

半年後、彼女は幼馴染と晴れて恋中になった。しかし、その3番目の彼氏は、2週間後に自殺した。

これで確定的になった。彼女の彼氏になった男は死ぬ。

そんな噂が経っても、中には挑戦する猛者が居た。

4番目の彼氏は、2週間後に病気になった。

それ以降、多くの男たちに告白されていた彼女に対して、さすがに告白する男は居なくなった。

以前は学年の中心的人物だった彼女は、「呪われた女」「不幸を撒く女」と悪口を言われ、女生徒にも避けられ始めていた。



「つまり、彼女の噂が事実でないことを証明するために、実験台になれと」

「そういうこと。確か、先週、オカルトネタは、ほとんどは偶然か勘違いか嘘って言ってたよな」

「確かにそうだけど・・・」

魔法や霊能力が起こす事件なんて存在しない。

推理小説好きの近藤としては、不思議なこと⇨霊的な物という考えは受け入れられなかった。

万が一、幽霊が居たとしても、テレビやネットで騒がれるのは、99%紛い物。

それが、先週の近藤の主張だった。

もしか、先週の会話は今日の伏線だったのだろうか？

星野にはめられたようだ。

「なんで、自分なんだ。星野の方が良いじゃないか・・・水上さんだって、僕より星野の方が嬉しいだろ」

「・・・」

久保と水上がお互いの顔を見合った。そして、水上が口を開いた。

「星野君は・・・駄目だよ」

「??」

「星野君は、皆の王子様だから・・・」

星野王子様。それが女性との間での星野守の二つ名だ。

見た目も良く、運動もできて性格の明るい星野は、女生徒に人気があり星野王子様と言われていた。

そして、王子様は誰のものでもない。皆のもの。だから、誰も手を出してはならない。

これが、この学校の女子の間での不文律である。

ちなみに、女性との間での近藤の二つ名は金魚のフン。

星野に、いつも付いている邪魔なものと言う意味らしい。

「こんなこと頼めるのは、お前しかいないだろ。それにこういうの嫌いじゃないだろ」

正直言って嫌いじゃない。

推理小説好きが高じて、名探偵にあこがれていた。

新聞を見て、推理するだけでは飽き足らず、高校生探偵と称して高校生相手に私立探偵の真似ごともしていた。

もっとも、漫画や小説のように活躍できるわけがなく、依頼の内容の大半が浮気調査だったけど。

「お前、彼女ことが可哀想だとは思わないのか？」

「思う」

「なんとかしてあげたい。力になりたいと思わないのか」

「思う・・・」

何か星野に丸めこまれている気もするが・・・力になりたいと言うのは嘘ではない。

機会がなかったから何もできなかったが、彼女が「呪われた女」

「不幸を撒く女」と悪口を言われているのを聞き、良い気持ちはいなかった。

しかし、簡単にOKの返事は出来なかった。

自分が死ぬかも、と言うこと以前に・・・

「1つ問題があんですけど。その・・・僕には、好きな人がいるんですが・・・」

クラスメートの小野寺さん。

好きな人がいるのに、他の人と付き合うなんて浮気みたいではないだろうか。

それに、このことが原因で、小野寺さんに嫌われる、縁が切れるようなことはないだろうか？

「問題ないよ。今後、付き合う可能性はないわけだし」

「・・・」

さらっと、とんでもないこと言うな久保は。

久保は、小野寺さんと仲が良いので、真実味があるだけ心に刺さる。

「本当に彼女のことを好きになれって言ってるわけじゃないんだよ。」と星野。

「建前上だよ。建前上。それに、嘘でも、女性と付き合えば、本命と付き合う際の練習になるだろ」

星野が近藤の側により耳元で女性陣に聞かれないように囁き始めた。

「それにな。女性って言うのは、フリーの男よりも、他人の男を欲しがるもんなんだよ。彼女と付き合えば、小野寺さんの関心もお前に向かうこと間違いなしだ」

そういうものなのだろうか？

女心に疎い近藤には判らなかった。

第3話 下校

その日の下校は、いきなり、彼女と一緒に下校することとなった。付き合っていることを皆に暗に教えるためだ。

近藤は自転車通学なのに対して、水上は電車通学なので、駅まで一緒に帰ることにしたのだが……

話すことがない。

近藤は自転車を転がしながら、水上に付いて行くだけだった。気を利かせて、水上さんの方から話しかけてくれることを近藤は期待したのだが、水上も、何も話さずにただ黙々と歩くだけだった。

星野や久保が居た時は、平気で話せたのに、2人っ気になった瞬間、近藤は何も話せなくなった。

偽りの恋人なのに、緊張で話せなくなるとは、もし、本当の恋人だったらどうなっていたのだろうか。

星野が言っていた、本命と付き合う際の練習になるというのは、もっともな指摘だった。

近藤は、自分はどうも少しこういう状況になれておくべきだと思った。

気不味い、長い長い沈黙の後、どうにか駅に付いた。

「じゃあ、ここでさようなら。また明日、8時にね」と近藤は別れの言葉を告げた。

「恋人と別れるのに、それだけなの？」

「他に何か？」

「お別れのキスは？」

「・・・・・・・・」

おそらく、自分のことを試しているか、からかっているのだろうと近藤は思った。

「ここでキスをすれば、恋人らしく見えるでしょ」

水上はつぶらな瞳で、近藤のことを見つめながら言った。

照れくささから近藤は、思わず視線を逸らしてしまう。

周囲を見渡すと、当然のことながら、同じ学校の生徒が何人も駅前に溜まり立ち話をしていた。

確かに水上さんの言うとおり、この場でキスをすれば周囲に恋人同士であることを印象付けられるだろう。

「演劇部なんだからできるでしょ」

「照明と音響の係なんだけど・・・・・・・・」

「じゃあ、私の方からしたほうが良い？」

それは、さすがにまずいと近藤は思った。

「判った。右手を出して」

「こう？」

近藤は彼女が刺し出した右手に軽く自分の右手を添えると、少し腰をかがめ、手の甲にキスをした。

「これが僕の限界です・・・・・・・・」

近藤が顔を上げ、水上さんの顔を見ると、驚いている様子も、怒っている様子はなく、むしろ少し喜んでいるようだった。

「今日のところは、これで許しあげるか。じゃあ、明日ね。バイバイ」

水上はそう言うのと駅の階段を軽やかに駆け上がって行った。

◇ ◇ ◇ ◇

近藤が家に着くと、珍しく家は明かりがついておらず、真っ暗だった。

通常なら妹である三女の里桜^{りお}が帰って来てる時間なのに。

『友達の家にでも行っているのだろうか？』

そんなことを考えながら、近藤が鍵を開け、家の扉を開けると、

「パン！パン！パーン！」

暗闇中で鳴る火薬の軽い爆発音。

一瞬、何かと思ったが、よく聞きなれたクラッカーの音だった。

電気がつくと、目の前には小六なのに、170センチ近い身長の妹の里桜^{りお}が居た。

「お兄ちゃん。おめでとう」と、なぜか妹からの祝福。

「えっ、なんで？ 1月生まれだから、誕生日とか全然先だし」

近藤には、何が起きたのか理解できなかった。

長身の三女、里桜の背後から、これまた長身の次女の美桜^{みお}が現われた。

「いや、信也くん。彼女出来たんだって。何でも・・・早々にキスもしたそうじゃないか。しかも路上で」

「なんでそんなこと知っているんですか」

「そりゃ、星野君からに決まっているだろ」

お酒を既に飲み、酔っている姉は嬉しそうに答えた。

「学年一の美少女なんだって。おねえちゃんは鼻が高いよ。これからおねえちゃんが、みっちり女の子を喜ばせるコツを教えてあげるよ。付いて来なさい」

その夜、近藤は三時間ほど、姉の講釈を聞くこととなった。



「今日下校の時に、近藤とキスをしたんだ」

水上は、ベットに寝そべりながら、小学校からの親友で同じ部活でもある高井まどかに、今日の出来事を話していた。

同じ部活と言っても、部活の間は練習しているので私語は話せない。

水上は毎日、30分、長い時は2時間ほど高井と話していた。

高井まどかは、運動もでき活動的でボーイッシュと、水上と対照的だったが、不思議と昔から仲が良かった。

「マジかよ。演技じゃなかったのかよ。近藤と付き合うのは」

「演技だけど・・・どうせするんだったら、本当らしくした方が面白いでしょ。それにしたのは、唇じゃなくて、手の甲よ」

「手の甲？」

「そう。唇にしても良かったのに。恋愛経験がない子って、面白いよね」

第4話 恋人

次の日は、朝から水上さんと一緒に登校した。付き合っていることを皆に暗に教えるためだ。

昨日の下校時よりも、皆が近藤を見ているような気がした。事実そうだろう。

そして、教室に入った瞬間、ざわつく教室と集まる視線に、近藤は自分がクラスの話題の中心、注目の的であることが良く判った。

そして、予想通りクラスメートの1人が、食いついて来た。しかし、予想外の人物だった。

近藤に最初に声をかけてきたのは、活発な雰囲気を感じさせるシヨートヘアの美少女。

僕の斜め前の座席に座る憧れの女性、小野寺さんが聞いてくるとは思わなかった。

「近藤君。水上と一緒に学校来たけど。もしかして付き合っているの？」

その質問に、クラスの注意が自分に集まっているのを感じた。

何とも言い辛い。

「その・・・付き合うことになりました」
背後から歓声が上がる。

「いつから付き合っていたの」

「つい最近かな」

「どっちから告白したの」

これはさすがに自分とは死んでも言えない。

「なっ・・・何となく・・・あえて言うとな彼女かな」

「そうなんだ。星野君や恵ちゃんも知ってたの？」

側に居る星野と久保に話しかける。

「あたしも昨日知って驚いたよ」

久保は白々しく答えた。

「星野君は」

「僕はもう少し前から。近藤に相談されてね」

した覚えはないんですけど。

こんな感じで、他の女生徒も巻き込んで、会話は先生が来るまで終わらなかった。

◇ ◇ ◇ ◇

一方、水上麗華もクラスメートから質問を受けていた。

「ねえ、麗華。6組の近藤と付き合っているって・・・本当？」

最初に、声をかけてきたのは、麗華の小学校時代からの親友の高井まどかだ。

事前に、高井まどかには話しており、これは演技だった。

変なことを聞かれないように、事前に聞き役を高井まどかに頼んでおいたのだ。

もっとも、細かいやり取りは決めておらず、アドリブでやることになっていた。

「本当よ」

周辺からどよめきの声が上がった。

「3組のバスケット部の近藤君じゃなくて、本当に6組の近藤なの？」

「そうよ」

「あの地味で、金魚のフンって言われてるアイツだよ。星野君じゃなくて？」

「そうだよ」

「えっ。なんで!!!」と高井まどかは声を荒げた。

「麗華。親友でしょ。なんでそういう大事なこと、私に一言も相談してくれなかったの」

「ごめん。いろいろあって。それに、近藤君って・・・そんなに悪い人じゃないと思うけど・・・確か地味だし、普通の人だけど・・・」

「まあ、確かに・・・性格が悪いつて聞かないし・・・後輩の面倒見も良いつて聞くし・・・身長だつて普通より高いし・・・見た目だつて悪くないし・・・でも、どこが良いのよ」

それは聞かない約束でしょと水上は思った。

演技上の恋人同士なんだから、近藤のどこが良いのかなんて、当然、水上には判らなかった。

だから、それを聞かれないために、高井に頼んだに、高井自身完全に忘れてしまっているようだ。

「それは・・・私にも判らない」

「何よそれ。それは一時の気の迷いよ。いろいろあったから」
周囲の女生徒もうなずく。

「今からでも、断りに行きなよ」

「それは駄目よ・・・だつて、私から告白したんだもの」
予想外の展開に周辺の空気が凍った。

「麗華。どこが良いかも判らないのに、告白したの？」

「しょうがないじゃない。だつて、好きなんだから・・・」

◇ ◇ ◇ ◇

2時間目の休み、男子学生がトイレに集まり雑談をしていた。

「なあ、知ってるか。近藤の話」

後から入ってきた鈴木は、高田に声をかけた。

「ああ」

「近藤の奴、羨ましいよな。あの水上麗華と付き合えるんだぜ」

「羨ましいか？ あの女と付き合おうと死ぬんだぜ」

「水上と付き合って、やれるなら、死んでも良いよ。近藤の奴、上手くやったよな」

「お前、前から麗華のこと好きだったからな」と手を洗っていた伊東が口をはさんだ。

「死んだら意味ないだろ」

高田は、水上を美人だと思うが、さすがに自分の命を犠牲にしてまで付き合いたいとは思わなかった。

「よっぽど、男に飢えていたんだな。近藤でもOKだってことは、俺でもOKだぜきつと」

伊東は肥満気味で容姿も悪く、女生徒の評判が良くないことを自分でも認識していた。

「なんでも、水上の方が告ったらしいよ」

「マジかよ。あいつのどこが良いんだよ」

今まで水上麗華が付き合っていた男は、みんな格好良く、女性に人気がある男ばかりだった。

そのため、自分と同レベルか、それ以下だと思っていた近藤が、告白されたとの話を聞いて、鈴木は本当に悔しそうだった。

「なあ、あいつが死ぬか。かけようぜ」と鈴木。

「いいな」と伊東。

「どうせなら、他の奴らも巻き込もうぜ」

こうして、学校全体で、近藤の生死をかけて、賭けが行われることになった。

第5話 昼休み

水上さんは1組で、近藤は6組とクラスは別々。

水上さんは茶道部で、近藤は演劇部と部活も別々なので、会うのは登校時と下校の時だけと近藤は思っていた。

「昼休み。ご迷惑じゃなければ、一緒に屋上でお弁当食べませんか」
そのため、3時間目の休み時間にメールが来た時は正直予想外だった。

◇ ◇ ◇ ◇

「その・・・こうした方が、恋人らしいかなと思ひまして」
「確かに・・・周りにも何人かいますし・・・」

既に学校の屋上には、多くの人が来ていた。
それは、いつも、教室で食べていた近藤にとって未知の光景だった。

女性だけのグループや男女混合のグループ。

そして、一番多かったのが男女二人だけのグループだ。

良い場所は既に取られていて、直ぐに、良い場所は見つからなかった。

どうやら、皆、早めに来て場所取りをしているようだ。

開いている場所を見つけると、さっそく弁当を食べ始めた。

春の日射しは暖かく、隣の席に座っている水上の髪が穏やかで優しい風にふわりとなびく。

水上がお弁当を食べている姿は、特別なことは何もやっていないのに不思議なことに可愛らしく絵になった。

近藤は、水上は何をしても綺麗だなあ、と思いながら、彼女が自分には酷く不釣り合いに感じられた。

最初の数分は沈黙の時間が続いた。

姉や妹もいるし、女友達もいるし、部活では女性の方が多い。

しかし、その会話は、兄妹の会話であり、友人としての会話だ。正直、恋人同士の会話なんて判らなかった。

最初に口を開いのは水上だった。

趣味の話から家族の話し。彼女は思ったよりも気さくな性格で、途中から思いのほか会話が進んだ。

「その・・・近藤さんのお弁当は誰が作っているんですか」

「自分で作ってます。両親が共働きで、海外出張も多くて。まあ、小6の妹以外は、みんな良い歳ですから」

「毎朝ですか？」

「毎朝。家族の分も作ってます」

「大変じゃないですか？」

「お金もらえるからね」

「そうなんですか」

なぜ、がっかりした様なリアクションをするのだろうか？

そして、何か非常に言い辛そうだ。

「その・・・少し作ってみたんですけど・・・食べていただけますか」

そう言うと彼女はカバンから小さな弁当箱を取り出した。中には、綺麗にできた手作りの卵焼きなどが入っていた。

「僕のところにも卵焼き入っているの、交換しましょう」

「そうですね」

「いただきます」

互いに互いの卵焼きを交換して食べる。

水上の卵焼きを食べてみると・・・美味しい。とろとろの卵焼きだ。自分の卵焼きが、甘めの子供向きだとした、こちらは大人向けでしょうか。

うーん、本当にいろいろできる人だな。これで運動もできたら、完璧超人ではないだろうか。

それにしても、彼女がここまで恋人の振りをするとは意外だった。もっと片手間な物だと思っていたのだが・・・

「美味しいね」

「近藤君のも美味しいよ。近藤君はこういうのが好きなんだ」

それにしても、何なんだろう。この空気は。傍から見たら完全にラブラブのカップルではないだろうか。

「ごめんなさい。迷惑掛けているでしょ。私、今のところ、これくらいしか近藤君に恩返しできなくて・・・でも、近藤さんが自分で作るんだったら必要ありませんね。私、どうしたらいいんでしょうか？」

どうやら、恋人の振りではなかったらしい。自意識過剰だな。

「気にしなくて良いですよ。僕も割と楽しんでますし」

「そうですか。お優しいんですね」

「いや・・・それ程でも・・・」

非常に照れくさい。

一方的に相手の好意に甘える関係というのは、意外と苦しい物だ。僕としては彼女との関係を円滑にしたいのだが・・・何か彼女にしてもらえないことはないだろうか。

「そうだな。終わったら・・・小野寺さんとの仲を取りもってよ」

「それで良いんですか？」

近藤は頷いた。

「判りました。頑張ります」

彼女は頑張ることを近藤にアピールするために可愛らしく小さくガッツポーズをした。

彼女の少し明るくなった態度を見て、何か少し関係が前に進んだような感じがした。

「その・・・甘えついでに、もうひとつ、お願いして良いですか？」

「何ですか？」

「今週の土曜日、時間がありましたら・・・その・・・デートしませんか」

その言葉を聞いて、驚きのあまり、近藤は思わず、食べ物をものどに詰まらせてしまった。

第6話 脅迫

「土曜日にデート？ いつからそんな関係になったんだ」
星野が驚嘆の声をあげた。

場所は体育館の壇上の幕の裏。

部活の休憩時間を利用して、星野に現状報告することにした。

「今日の昼休み。彼女の方から」
近藤も得意げに報告する。

「ずいぶん楽しんでいるのね。こっちは心配で夜も眠れないのに……」と久保。

「冗談だろ」

「当然、嘘に決まっているでしょ」

「まあ、楽しむのは良いけど。あんまり浮かれるなよ。今、学校でお前の生死を賭けた賭けが流行っているんだから」

自分の命が賭けの対象か。

正直、気分が良い物でもないし、賭け自身法律違反だが……ここでそれを言ったら怒るのは野暮だろう。

「比率は？」

「2対3かな」

「どっちが3なんだよ」

「お前が死ぬ方だ」

「みんな酷いな」とは言ったものの過去3人は漏れなく死んでいるわけで……

みんなが死ぬ方に賭けなくなる気持ちも判らなくもない。

「だったら、生きる方に1万円賭けておいて。生きる励みになるから」

「じゃあ、俺は・・・お前が死ぬ方に1万円な」

「じゃあ、私は5千円かな」

「何だよ。それ」

「お前が死んだとき、悲しみが癒えるだろ」

「・・・」

「冗談だよ。俺は、お前が生きる方に1万円賭けているんだから頑張ってくれよ」

◇ ◇ ◇ ◇

現在の時間は夕方の6時31分。1分遅刻だ。

一緒に下校するため、6時30分と待ち合わせしていたのに遅れてしまった。

水上さんが校門のところで僕を待っているが、ロビーからも見える。

その姿が妙に愛らしい。

偽りの恋人同士のはずだったのに。

登校と下校の時だけの付き合いのはずだったのに。

土曜日、デートですか・・・

何と言うか、どんどん展開がエスカレーションしている。

ひょっとしたら、水上さんとあんなことやこんなことをする関係にまで発展するかも。

そんなことを妄想しながら、僕は下駄箱を開けた。

隙間から入れたのだろうか。

中には、一枚の手紙が入っていた。

まさか、ラブレターか。

まさかのモテキ到来か。

手紙には、宛名も差出人の名前も書いていない。

急いで手紙を開けると1枚の紙が入っていて、その紙には2行の短い判り易いメッセージが書いてあった。

「水上麗華と直ぐに別れろ。

さもなくば死ぬことになるぞ」

さっきまで浮かれていた自分がバカみたいだ。

でも、この手紙でいくつかのことがハッキリした。

悪霊が手紙を出すはずがないので、彼女は人間に恨まれている。しかも、直ぐに手紙が来たことから、たぶん、この学校の人間にだ。

過去にも、彼女の彼氏たちは、このような手紙をもらっていたのだろうか？

彼女に聞く必要がある。

でも、今日の下校時は止めて明日にしよう。

せめて、今日くらいは、楽しく終わりたいから。

◇ ◇ ◇ ◇

昼休みに打ち解けたせい、昨日と打って変わって、いろいろと話すことが出来た。

昨日は、長く感じられた時間も、なんだかあっという間に過ぎて、

駅に着いた。

「じゃあ、また明日」と自転車に跨る近藤。

「近藤君。」

水上が呼び止めた。

「何？」

「頭にゴミ付いているよ」

水上は、自分の側頭部を指さす。

「そう？」

近藤は頭を払った。

「取れた？」

「取れてないよ。しょうがないな。こっち向いて。取ってあげるから」

近藤は水上に言われるがまま、何も考えず、水上の方を向いた。

その瞬間、水上は、近藤の首に手を回すと、近藤にキスをした。

とっさのことに、呆然とする近藤。

そして、我に帰ると、徐々に近藤の顔は赤くなっていった。

「男の方が、顔赤くして、どうするのよ。じゃあ、明日ね。バイバイ」

水上はそう言うのと駅の階段を軽やかに駆け上がって行った。

◇ ◇ ◇ ◇

近藤はベットの中で、水上さんとのキスを思い出していた。

近藤は自分の唇に触れながら、彼女の唇の甘い感触を思い出した。

デートの話といい、今回のキスといい、彼女は予想以上に積極的だった。

単純に近藤をからかっているのだろうか。

それとも、もしかしたら、本気なのだろうか？

本気だとしたら、小野寺さんと水上さん、どちらを選ぶべきなのだろうか？

近藤は、そんなことを考えながら、いつの間にか寝てしまった。

第7話 暗い影

登校後、下駄箱を開けると、また手紙が入っていた。

封筒は昨日と同じものだ。

昨日と同じ脅迫状だろう。

手紙を開けると、昨日と同じように、短いメッセージが書いてあった。

「お前は死ぬ。残りの人生をせいぜい後悔して生きるが良い」

昨日は脅迫状だったのに、たった一晩で、死亡宣告になっている。しかも、殺すではなく、死ぬになっているところが、何とも微妙な表現だ。

昨日と今日とで違う点と言えば、キスをした点だろう。

キス一つで、死亡宣告か。

人生は、どうやら等価交換ではないらしい。

◇ ◇ ◇ ◇

昼休み。

前日の失敗を糧に、場所取りのために、授業が終わると直ぐに屋上に向かった。

意外なことに、まだ、誰も来ておらず、1番だったようだ。

うちの学校の良いところは、屋上にベンチがある点だ。

そして、座るんだったら、南向きで温かく見晴らしが良いところ

が良かった。

近藤は場所取りをすると、水上さんを待った。

「近藤君」

背後からの呼び掛けに、振り返るとそこには、水上さんではなく、憧れの小野寺さんが居た。

なぜ、小野寺さんがこの場に居るのだろうか？
いつもは教室で食べているのに。

「近藤君。水上さんと一緒にランチを食べているの？」
「そうです」

「水上さん。近藤君のためにお弁当作ってるんだってね。美味しい？」

「なかなか、美味しい・・・です」
「ふう〜ん」

そう言う小野寺さんは、フェンスに近づいた。

そして、振り向くと近藤に対して突然予想外の質問をした。

「ねえ、近藤君。私と水上さん、どっちの方が好きなの？」

近藤としては、当然、小野寺さんだ。

だが、現状の建前上、小野寺さんとは言い辛い。

「今、言わないと駄目ですか」

「ハッキリしないわね」

そして、何を思ったのか、突然、軽々とフェンスを超え、屋上の淵に立った。

「日射しと風が気持ち良いわよ」

「あぶないよ。小野寺さん」

「スリルがあって楽しいんじゃない。近藤君も来なよ。それとも来る勇気ない」

弱虫に思われたくない近藤は、慎重にフェンスを越えた。

校舎は4階建てなので、地上まで十五メートル近くあるだろうか。正直、近藤はかなり怖かった。

一方、小野寺さんは、そんな場所なのに顔色一つ変えないで笑顔で立っていた。

「もう一度聞くね。近藤君。私と水上さん、どっちの方が好きなの？」

「本当に、今、この状況で言わないと駄目ですか」

近藤としては、当然、小野寺さんなのだが、近藤としては、もっとロマンチックな状況で言いたかった。

「駄目。今すぐ言って……直ぐに行ってくれないと、飛び降りるわよ」

「そりゃ……当然……」

「近藤君。何やっているの？」と激しい口調の声が聞こえた。

声の方向に振り向くと、心痛な表情をした水上さんと、なぜか高井まどかが居た。

「その……いろいろありまして。ねえ、小野寺さん」
振り返ると、そこには誰も居なかった。

さっきまで間違いなく、そこに居たはずなのに。

それに、周囲には誰も居なかったはずなのに、何人もの生徒が、

既に屋上には居た。

幻覚なのだろうか？

「・・・・・・・・ ちょっと、ペンを落としまして。大丈夫です。もう拾いましたから」

近藤は自分でも下手な嘘だと思った。

近藤は、誤魔化しの笑顔浮かべながら、再び慎重にフェンスを越えた。

「・・・・・・・・ 私・・・・・・・・ 私・・・・・・・・」

水上は、それ以上言葉を続けなかった。

そして、薄らと涙目になり始めた。

近藤には、その先の言葉が想像できた。恐らく、近藤が自殺すると思ったのだろう。

女性に泣かされることはあっても、泣かすことはないと思っていた近藤には、彼女を落ち着かせる気の効いた言葉が思いつはずもなかった。

「・・・・・・・・・・」

側に寄ることもできず、ただ彼女を見るだけ。

水上に寄り添うように立っている高井まどかも、何も言わず僕を見つめるだけだった。

気不味い沈黙を破ったのは水上だった。

「近藤君。早く。こっちに来て、ご飯食べよう」

水上は、明るい声で近藤に呼びかけた。

「そうですね」

近藤も、無理をして明るい返事をした。

「ところで・・・・・・・・なんで高井さんが居るんですか」

「あたしか？ あたしは、言わば・・・・・・・・水上の保護者だ。お

前が水上に悪さをしないか、水上にふさわしい男かをチェックしに来た」となぜか自信満々に胸を張りながら答えた。

「そっ・・・そうですか」

近藤と水上、高井は、ベンチに座り昨日と同じようにお弁当を食べ始めた。

「へえ、これが噂の近藤君の手作り弁当ですか」

「まどかも食べる？ 美味しいよ」と近藤が水上にあげただし巻き卵を高井に進める。

「いただきます」と高井は手を伸ばし、だし巻き卵を食べる。

「確かに、悪くないわね。でも、ちょっと・・・甘すぎ、お子様向きね」

そして、しばらく考え込んだ後、「85点」と点数をつけた。

「おいおい。もらっておいで、点数つけるのか？」

「言ったでしょ、チェックしに来たって。今時の男は料理が出来ないのは駄目ね。まあ、毎日やっているだけあって、料理に関しては合格かな」

「そう言う高井さんは料理できるの？」

高井から家庭的という印象は受けなかった。

「もちろん、できるよ。水上から教えてもらったから。この弁当だって、自分で作ったんだ」

そう言っ、弁当を見せたが、ミートボールなど弁当のおかずの大半は冷凍ものだった。

「・・・この焼き鮭は」

「もしかして、だし巻き卵はできないのか？」

「出来るに決まっているだろ。明日持って来てやるよ」

「明日は土曜日だ」

「なら、来週の月曜だ」

しばらく小学生の様なやり取りが続いた後、「明日、デートでどこに行くのか」「映画は何を見るか」「何を食べるか」などを簡単に話し合った。

近藤としても、彼女と二人だけの時よりも、高井が居た方が正直気が楽だった。

そのため、彼女たちとの会話は、表向き、昨日以上に楽しく進んだ。

だが、近藤の頭は常に別のことを考えていた。

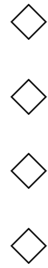
なぜ、あんな幻覚を見たのだろうか？

もしかしたら、水上さんの彼氏たちが死んだのは、あのような幻覚を見せられたのが原因ではないだろうか？

そして、このことは、死の手が迫って来ていることを意味するのだろうか。

そして、どうすれば、死の手から逃れられるのだろうか。

近藤は、昼休み以降、一日考え続けたが、結局答えは何も出なかった。



水上との下校も、三度目となるとだいぶ慣れてきて、だいぶ話せるようになってきた。

「近藤君。私、明日のデート。結構楽しみにしているんですよ」

「水上さん。そんなにプレッシャーをかけないでくださいよ。何度も言いますが、僕は女性と二人でデートするのは初めてなんですから。水上さんがエスコートしてください」

普通の彼氏なら、彼女に対して間違っても言わない弱音だろう。

「駄目よ、それじゃ。小野寺さんのデートもリードしないつもりなの……」

「……………それは……………まずいよな……………」

「練習で出来ないものは、本番でも出来ないのよ」

「……………頑張ります」

駅に着いた。

「今日もキスする？」

近藤は、水上がキスと言うだけで顔が赤くなった。

首を振って拒否する近藤。

水上は、そんな近藤を見て、微笑した。

「じゃあ、明日ね。遅刻するなよ。バイバイ」

水上はそう言うのと駅の階段を軽やかに駆け上がって行った。

第8話 呼び出し

お風呂から上がった後、近藤は寝る前にメールを確認した。
一通、差出人不明の気になる表題のメールが入っていた。

「水上麗華の彼氏へ」

急いで本分を読む。

「不幸を避けたければ、今夜十一時に、一人で○×公園に来い。ブ
ランコのところまで待っている」

いきなりの呼び出しだ。

もしかしたら、今日、脅迫状を出した人物かもしれない。
行くべきか。

行ったら襲われるかもしれない。

しかし・・・うまく行けば相手の正体を掴むチャンスだ。

近藤は大急ぎで、パジャマから外出着に着替えると、自転車で○
×公園へと向かった。

◇ ◇ ◇ ◇

○×公園は、近藤の家から五分程離れ、団地の側にある小さな公
園だ。

日中は幼稚園生や小学校低学年生が良く遊んでいる公園だが、夜
の十一時にもなると、通常はさすがに誰も居ない。

しかし、今夜は、公園の外灯が、スポーツバックを地面に置きブ
ランコに座る長髪の女性を浮かび上がらせていた。

どうどうと相手が姿を現すのは、近藤にとって予想外だった。

近藤はメールの内容を信じては居なかった。

近藤が公園に近づいたところを、背後から襲う気なのではと考えていた。

そのため、相手の裏をかき、距離を置いて公園の周りを探索して、メールの差出人の正体を探ろうと考えていたのだ。

もっとも、仲間が居て、一人じゃない可能性もある。

近藤は警戒して周囲を調べるが、彼女の仲間らしき人物はいなかった。

時計を見ると十一時十分になっていた。

どうやら相手は本当に近藤と会いたいらしい。

近藤は意を決して、相手の側に行くことにした。

少し近づくと彼女の顔をより正確に見ることが出来た。

凛とした顔つきの女子高生らしき女性だ。

ベージュのブレザーにジーンズと落ち着いた服装が長身でスリムなスタイルに良く似合っていた。

鼻目に見ても、美人に入る部類の女性なので、同じ学校であれば覚えているはずなのだが、まったく顔に覚えはなかった。

間違はなく他校生徒だろう。落ち着いた大人びた感じなので、女子大生かもしれない。

「あなたが近藤信也君？」

近藤に気がついた彼女はブランコに座りながら僕に声をかけてき

た。

名前で呼ばれたことに驚きはなかった。相手は交友関係が広いとは言えない自分のメールアドレスすら知っているのだから、名前を知っていても何らおかしくなかった。

「そうです」

「最初から女性を待たせるなんて、ずいぶん大胆ね」

「そこは相手次第ですよ。それで話って何ですか」

「そう焦らないの。そんな緊張して立っていないで、横に座って頂戴。話辛いでしょ」

彼女は明るい声で僕を隣のブランコへ誘う。

近藤は背後に気をつけながら、彼女に横に座った。

「当然、あなた、彼女の噂知っているんですよ。なんで彼女と付き合おうと思ったの？ 美人だから。それとも、好奇心。それとも、一目惚れ？」

彼女は茶化すような口調で質問を始めた。

「そんなのあなたには関係ないでしょ」

「大いに関係あるわよ。特に私のモチベーションにね」

「モチベーション？」

変な理由を言う人だなと近藤は思った。

「そうよ。あなたが心の底から彼女を愛しているなら手伝う気になるし。好奇心なら・・・死んでも自業自得かな」

「あなたは、彼女の何を知っているんですか？」

「あなた彼女が本当に呪われていると思う？」

「彼女は、呪われていません」

「そうよね。そうじゃないと付き合おうなんて考えないわよね。彼女は呪われていない。それは正しいわ。でもね。彼氏が間違いなく死ぬって点も間違っていないのよ」

そう言うのと彼女の顔は突然真剣なものになり、近藤の目を見て話し始めた。

「今のままでは、あなたは殺される。間違いなくね」

殺される？

どうやら、彼女は事故死や自殺ではなく、他殺だと考えているようだ。

彼女は警察以上の何かを知っているのだろうか？

「あなたは、彼氏が死んだのは事故ではなく、他殺だって言うんですか」

「間違いなくね。彼女の側に、彼女の彼氏を呪い殺す人間がいるの」
「警察の結果では事故や自殺ですよ。それも呪いの結果のろいですか？ 呪の結果、都合良く事故に合い、自殺すると」

「そうね。結果的に、この世界ではね。でも、別の世界では違うわ。彼らは悪魔に魔力で殺されたのよ」

何か話が急におかしい方向に行き始めたぞ。

「なんで、そんなことが言えるんですか？」

「それは簡単よ。私が『茨の魔女』だから。私が悪魔と契約した人間だからよ」

第9話 茨の魔女

「悪魔と契約した人間。それを信じろって言うんですか？」

「そうよ。信じられないかもしれないけど」

近藤が足元を見ると、地面から茨の蔓が伸びて足に絡まっていた。急いで立ち上がり、蔓を払い除ける。

「どうやら見えてはいるみたいね。資質はあるようね」

「今、何をしたんだ。心を見たのか」

「そうよ」

「そんなことが出来るわけがない」

「できるのよ。私は魔女なんだから。触れないと無理だね。だから、あなたが彼女と付き合う理由も判った。彼女が呪われていないこと証明するために付き合うなんて、あなたよっぽど、バカかお人好しね」

当たっている。何で、ここまで判るんだ。

判った。これは夢だ。

自分の夢なら、自分の心が全て判ってもおかしくない。そうに違いない。

近藤は、自分の頬を強く抓った。

猛烈に痛い。

夢じゃないのか？

「言っとくけど。痛みでは夢か現実の判断はできないわよ」

「百歩譲って、貴女が魔女だとして、僕はどうすれば良いんですか？」

「戦うしかないわね。本当は、あなたを囿にして相手を誘き出して、あたしが戦おうかと思ったんだけど、あなたに資質があるのであれば、あなた自身が戦えば良い」

自分自身が戦う。

この女性が怪しい茨を使って心を読むように、僕にも何かしらの力があると言うことか？

「でも、どうやって。相手も判らなのに」

「相手は判っているわ。ソロモンの悪魔の1人のビフロンよ。あなたに会って、相手の正体が判ったわ」

「ビフロン？ 僕に会っただけで、なんで、そんなことが判るんですか？」

「あなた。首筋のところに、印章を付けられているわよ。見てみる」
そう言うと、彼女は近藤に鏡を手渡した。

鏡を使い首筋を見ると、彼女の言うとおり、魔法陣のような黒い印があった。

「これが呪なんですか」

「呪というよりマークね。単純な分だけ、頑固な汚れ並みに落ちないわよ」

「あなたの言うことが正しいとして、どう戦えば良いんですか」

「普通の人間が悪魔と戦うのは不可能よ。でも、あなたには簡単方法があるわ。悪魔と契約すれば良いのよ。私の様にね」

「悪魔と契約するって、……簡単に言いますね」

「確かに、今すぐここで決断しろというのは難しいかもしれないわね。でも、とりあえず準備だけはしておいた方が良いわね」

そう言うとな彼女は、伏せた4枚のカードを、近藤の目の前に提示した。

「この中から一枚カードを抜いて」

近藤は言われるがまま、一枚のカードを抜いた。

「絵柄を見せて」

裏返し、絵柄を見るとそこには、一人の旅人らしき男と一匹の犬が描かれていた。

「愚者。マルコシアスのカードね」

愚者？

マルコシアス？

いったい、彼女は、なんことを言っているのだろうか？

「いい。彼と付き合うコツは、正直で居ること。彼相手に嘘は駄目よ。呼び出し方は簡単。困った時に、マルコシアスと叫ぶのよ。そうすれば……多分、力を貸してくれるわ」

「そんなざっくりで良いんですか？ しかも、多分ですか」

「マルコシアスは戦闘系だから、大丈夫ね。多分」

この魔女さんは、どうやらかなり大雑把な性格のようだ。

「重要なのは、戦う意志よ。じゃあ頑張ってね」

そう言うとな、彼女はスポーツバックを背負い去って行った。



「マルコシアス……」

一人残されて公園で、近藤は悪魔の名前を呼んでみた。

何も起きない。

声が小さいからだろうか。

大声では・・・恥ずかしいよな。
でも、一回くらい試してみるか。

「マルコシアス!!」

近藤は目一杯大きな声で叫んでみた。

何も起きない。

周囲を見ると、立ち止まってこちらを見ている女性が居る。
やばい、明らかに変質者だ。

近藤は、急いで自転車に乗ると、自宅へと向かった。

◇ ◇ ◇ ◇

近藤は家に帰ると、ネットで悪魔について調べて見た。

有名なネット上の辞典に乗っており、簡単に調べることが出来た。
かなり有名な悪魔の様だ。

マルコシアス。

ソロモン72柱の魔神の1柱で、30の軍団を指揮する地獄の
いなる侯爵とある。

その姿はグリフォンの翼と大蛇の尾を持った口から炎を吐く狼
らしい。

召喚者が望めばマルコシアスは人の姿となり、強大な戦士になる
とのことだ。

そして、翼に「炎のツララ」と呼ばれる不思議な武器を持ってい
るとある。

確かに、戦闘向きだ。

ビフロン

ソロモン72柱の魔神の1柱で、地獄の伯爵とある。

召喚者の前に現れる時の姿は不明。死霊術や幻術にも長けているとある。

今日の幻覚は、ビフロンが見せたと言うことなのだろうか？

首筋に残っていた印は、気のせいかなビフロンの印章に似ている。

こんなものは過去に見たことがないので、自分でつけたとも思えない。

魔女に会ったことやその話は、夢や幻じゃなく、やはり、現実なのだろうか。

明日デートだっていうのに、妙な悩みを抱え込んでしまったと近藤は思った。

第10話 契約

夢だと言うことは、直ぐに判った。

なぜなら、白いワンちゃんが出てきて、いきなり「アイフォンを欲しくないか」と聞いてきたからだ。

「欲しい。でも．．．お金ないんだけど」

「学生は、お試し1週間無料」

「なら．．．」

ミミズが這ったような魔文字は気になったけど．．．無視しちゃったよ。

お父さんに、契約勧められたら、サインするでしょ。

サインした直後に、いつも通り自分のベットで目が覚めた。

人生初のデートの日に変な夢を見たもんだと思った。



朝ごはんの準備を全て終え、居間に行くと予想外のことが起きていた。

姉の真桜まおがアイフォン5を買うということで、アイフォン4をくれたのだ。

もっとも、それは口実で、妹の里桜りおが言うには、なんでも、アイフォンを使って出来る男を演出しろという姉なりの気遣いらしい。

その程度のことと、近藤が出来る男になるとは思えないのだが．．．
．．．．．ありがたく貰うことにした。

夢の中の願いが、早々に現実になったのだ。

「本当に、悪魔と契約してしまったかもしれない」

ここで言う悪魔とは別に、高利貸しでもなく、鬼嫁でもない。
文字通り本物の悪魔だ。

帰宅の途中、怪物に襲われて、悪魔に助けてもらったわけでもなく。

朝、目覚めたら、隣に可愛い小悪魔が裸で寝ていたわけでもなく。
別に誰かを恨んでいたわけではなく。世界征服をしたく召喚したわけではなく。

ただ、単純に勢いで、近藤信也は悪魔と契約してしまった。

近藤信也は、自分の手の中にある 아이폰 を見て、そう思った。

偶然に決まっている。まぐれだ。

でも、万が一・・・本当だったら・・・僕は悪魔に願いことを叶えてもらったことになったのだろうか。

もしかして、対価として魂を取られるのだろうか？

アイフォン4の等価交換が、魂か？

どんだけ安いんだ。自分の命は。

それとも仮契約だから別の対価だろうか。

お金がなかったので本契約ではなく、1週間お試し期間の仮契約にしたのは正解だった。

「ねえ、お兄ちゃん知っている」

近藤が目玉焼きを食べていると、パジャマ姿の妹、里桜^{りお}が話しかけてきた。

「昨日の夜、○×公園に。変態が現われたんだって・・・」

「どんな変態が出たんだ」

「何でも。夜、公園で悪魔の名前を叫んで、悪魔を召喚しようとしてたんだって・・・」

もう伝わっているのか。

「お兄ちゃん。気持ち悪くない」と同意を求める妹。

妹よ。その変態は、兄です。すいません。

変態か・・・

妹のさりげない言葉に、傷つく近藤。

「そうだね。怖いね」と近藤は適当に濁した返事をした。

さすがに、自分のことを気持ち悪いとは言えなかった。

「きっと、悪魔教信者か、ゲームと現実の区別がついていない妄想バカだな。春になるとそう言う変態が増えるんだよ。気をつけるんだぞ。里桜」

姉の真桜が妹の里桜に教示した。

妄想バカ。確かにその通りかもしれない。

近藤自身、いまだに、昨日の女性の話を完全には信じられていない。

傍から見たら、間違いなく妄想バカだろう。

それにしても、昨日の夜ことがもう伝わっているのか。一体どれだけ早い連絡網なんだ。

近藤は、近頃の小学生の情報収集能力に舌を巻いた。



十一時三十分。吉祥寺駅の北口。サンロードの入り口付近。

吉祥寺は、全国的に有名な街だけあって、既に通りは人で溢れていた。

近藤は銀行の壁に寄りかかりながら、水上を待っていた。

約束の時間には、まだ三十分もある。

近藤自身は、もう少し遅く家を出ようと思ったのだが、初デートに遅刻は厳禁と、早々に家を追い出されたのだ。

まだ、まだ来ないだろうなと思っていると・・・

人込みの中に、気のせいかよく見慣れた人影が・・・星野と久保だ。

急いで、星野に電話をかける。

「いや、星野と久保がつき合っているとは知らなかったよ。しかも同じ時間場所とは偶然だね」

「ばれちゃったか。いや、気になってね。気が付いたら、この場所に居たよ」

近藤は、後をつけないように釘を刺して電話切った。

直後、メールが来た。

水上さんからだ。

「すみません。待ち合わせ場所変更できますか」

星野と久保が居る以上、むしろ変更してもらった方が都合が良い。問題ありませんと、直ぐに返信した。

すると直ぐに返事が来た。

「十九デパートの屋上でお願いします。オープンカフェで待っていてくださいね」

近藤は、星野と久保を巻くために、わざわざ入り組んだハーモニカ横丁を通り、十九デパートへと向かった。

第11話 永遠の世界へ

十一時二十五分。

水上麗華は、高井まどかに突然、呼び出され、吉祥寺駅側の喫茶店で会うことになった。

水上は白いワンピースにスカートと女性らしいのに対して、ボーイッシュな高井は灰色のスエットにジーンズと対照的だ。

「どうしたの。まどか。急に会って、話したいことがあるなんて」

「実は、私も好きな人が出来てね。水上に相談したくて・・・」

「本当。誰？ 私が知っている人？ 同じ学校の人」

「うん。良く知っている人」

◇ ◇ ◇ ◇

十九デパートの屋上は、昔ながらのデパート屋上という感じだ。

コインで動く乗り物や遊具、植物が植えてあり、天気の良い休日の午後になると子供連れの家族が結構利用している。

しかし、午前中ということもあり、屋上にいるのは近藤ただ一人だ。

近藤は、言われた通り、オープンカフェで待つことにした。

やることも特にないので、屋上の出入り口や雲を見て過ごす。

待っていると、水上さんが、屋上の出入り口に現われた。

大声で呼ぶべきだろうか？

それは少し恥ずかしいので、手を振って合図を送る。

水上さんも、近藤に気が付いて、可愛らしく小さく手を振る。

気のせいかな、水上さんの姿が歪み始めた。

そして、再びハッキリ見えるようになると、水上さんの姿は高井さんに代わっていた。

「全然、驚かないのね」

高井まどかは、遠くから大きな声で近藤に話しかけてきた。

「そりゃ、君を容疑者の一人に考えていたからね」

「何でそう思ったの？」

「行動と動機さ。犯人の行動は、彼氏の排除を狙ったものだ。

だから、最初は彼女のことを妬む女性や振られたことを恨む男だと考えた。

でも、あの呪いの発動条件は、たぶん肉体的接触、キスだ。つまり、犯人が本当に恐れたのは、ただ単に付き合うことではなく、肉体的接触ということだ。

そうなると、彼氏を作らせないことが目的ではなく、彼女の清純さを守ることが目的かもしれない。

そんなことを第一に考えるのは、家族か。彼女のことを聖女のように崇める人間。

もしくは彼女は彼女を愛しているけど、そのような行為が出来ない人間。もしかして・・・高井さんは同性愛者？」

「私は高井さんを愛しているわ。そうね。私、本人が気が付いてないだけで、同性愛者かもしれない。でも、あなたの推理は半分外れ。ところで、あなた、何者？ 私の幻術が利かないなんて。霊能力者。それとも、私と同じ悪魔契約者」

「さあ、どうかな」

「どっちでも、良いか。どのみち、死ぬんだから。ビフロン」

高井が悪魔の名前を叫ぶと、彼女の体から巨大な異形が現われた。身長は高井の倍の3メートルほど。上半身こそ人型だが、下半身は蛇のように化け物。

全身、白い炎で燃え上がる亡霊。いや、むしろ人魂が人型に集まった感じだろうか。

熱さは感じない。むしろ、命を吸い取られるような寒気すら感じる。

ビフロンは、死霊術や幻術にも長けているとあった。

警戒すべきは、幻術。そして、死霊術に優れていると言うことは、悪霊を召喚する可能性も否定できない。

「マルコシアス」

近藤は、高井と同じように、悪魔の名前を叫んだ。

すると不思議なことに、体の中に力が溢れ、何かが体の中を通り抜けた。

そして、近藤の背後にも、天使のように翼を生やした人型の異形が現われた。

両手には……何も持っていない。どうやって攻撃するんだ。

「あなたも、悪魔契約者か。でも、私は負けない」

そう言うと高井が召喚したビフロンが、近藤に向かって来た。

ビフロンは予想より遥かに素早く移動した。

殴るしかないか。

近藤は覚悟した。

マルコシアスも、近藤の思考に素早く反応し、ビフロンの右拳を繰り出す。

ビフロンの炎に近づいても、やはり熱さは感じない。命を吸い取られるような寒気を感じるが、殴るしかない。

マルコシアスの右拳は、見事にビフロンの顔面を捉える。まるでドライアイスに触れたときのような痺れや痛みを感じるが気にしている暇はない。

行ける。行くしかない。

そう判断した近藤は、続いて 左拳を繰り出す。そして、最後は右蹴りをビフロンの腹部に蹴り込んだ。

ビフロンは弾け飛び、屋上の入り口に激突する。

同時に、高井が悲鳴を上げ、しゃがみ込み。そして、嘔吐し始めた。

どうやら、悪魔へのダメージは本体へ連動しているようだ。

高井が動揺しているのは、近藤の目から見ても明らかだった。

近藤が悪魔契約者と戦うのが初めてあるように、高井も悪魔契約者と戦うのは初めてなのだ。

そして、その結果、明確な力違いあった。

昨日の女性が言っていた「マルコシアスは戦闘系だから、大丈夫ね」というのは、意外と正確な分析だったようだ。

ビフロンには何か秘密の能力、隠し玉があるのだろうか？
あったならば、動揺しないだろう。

「なに勝ち誇ってんだよ。近藤」

高井は腹を抱えながら、立ち上がった。

「勝ったと思ってるんだろ。確かにお前の悪魔は強いよ。でも、水上は渡さないよ」

フラフラしており、限界なのは明白だ。

「絶対に!!」

高井は、そう叫ぶとフェンスに向かって走り出した。

そして、ビフロンにフェンスを破らせると、屋上から飛び降りた。

急いで駆け寄る近藤。

屋上から下を覗くが、高井の死体も姿もなく、いつもと何ら変わらない大勢の人通りがあった。

◇ ◇ ◇ ◇

十一時三十五分。

水上麗華が、井の頭公園のベンチで近藤を待っていると、突然、高井まどかが現われた。

いつもの元気な高井と異なり、顔色も悪く酷く疲れている感じだった。

急いで、高井のもとに駆け寄る水上。

「どうしたのまどか。すごく調子が悪そうよ」

高井は何も返事をせず、突然水上を抱きしめた。

そして、水上の耳元で呟いた。

「やさしいな麗華は・・・」

そして、突然、高井は泣き出した。

「どうしたのまどか。何かあったの」

「麗華・・・永遠の世界へ連れて行ってあげる」

第12話 あいの世界

「水上は渡さないよ」とは、どういう意味なのか。

水上に電話をかけるが、通信圏外か電源が切れていると言われてしまう。

水上が来なかったこと。メールが水上の携帯から来たことを考えると、水上は高井に捕まっている可能性が高い。

女性であり、車の運転もできない高井が、日中に人を移動されるの困難だ。

となると、どこか高井の馴染みのあるところに監禁している可能性が高い。

でも、いったいどこへ。

近藤は、見当もつかなかった。

昨日の夜に会った女性、自称茨の魔女に相談することにした。返信のメールをすると、直ぐに会えるとのことだ。

マック〇で待っていると彼女は20分程で来た。

昨日とは違って、彼女は、どこかの高校のセーラー服を着て来た。だが、相変わらず大きなスポーツだけは持っていた。

「たぶん、あいの世界に逃げたのね」

「あいの世界？」

「物質世界と精神世界の間。真実と偽りの間の世界よ」

近藤には何を言っているか理解できなかった。

しかし、とりあえず彼女を信じて話を進めるしかなかった。

「どうすれば、その世界に行けるんですか？」

「行くこと自体は難しくないわ」

そう言うのと、清水は赤いカプセル剤と青いカプセル剤を近藤に見せた。

「青いカプセル剤を飲めば、簡単にあいの世界へ行けるわ。問題は居場所ね。」

高井さんのことを思い浮かべて、薬を飲めば高井さんの作った世界へ行けるんだけど・・・あなた、高井さんのこと良く知ってる？」

「正直良く知りません」

「じゃあ、高井まどかさんの家に行きましょう。彼女の部屋を見れば、彼女のことを良く判るから」

「それより先に・・・」

「何？」

「名前教えてもらえませんか？」

自称、茨の魔女さんは、しぶしぶ名前を教えてくれた。

本当に本名か判らなかったが、あおい清水葵と名乗った。

そして、彼女は、ストラスという知恵と知識がある悪魔と契約していることを教えてくれた。

高井まどかの家の場所は、清水さんがネットから探し出した。これも、悪魔の能力のひとつだそうだ。



高井まどかの家は、武蔵○大学側の閑静な住宅街にある二階建ての一軒家だった。

母親の趣味だろうか。庭は良く手入れされていて、玄関には色あざやかな可愛い花の鉢植えが数多く飾られていた。

着いて早々に、清水は玄関のブザーを押した。

返事がない。

留守のようだ。

清水は、門を開けて勝手に家の敷地の中に入っていく。

「良いんですか」

「良いわけではないだろ。不法侵入だ」

「鍵はどうするですか」

「開ければ良いだろ」

そう言うと、清水はスポーツバッグの中から怪しい道具を取り出し、鍵穴に差し込んだ。

5秒程度の時間で、扉は開いてしまい、清水は、どうしようと家の中に入って行った。

◇ ◇ ◇ ◇

高井まどかの部屋は、ごく普通の女子高生の部屋だった。

部屋は、ほどほどに散らかっており、床や枕元には、ファッション誌や漫画や小説が積まれていた。

本棚には、ファッション誌や漫画や小説以外にも、悪魔や魔術、天使に関する書籍が何冊もあった。

引き出しの中には、何冊ものプリクラ手帳が合った。

写真を見ると、半分近くが水上とのものだ。

彼女の水上との関係、執着というべきだろうか、それが良く判る。

「日記とかはつけてないようだな」

「ブログじゃ駄目なんですか？」

「もちろん。駄目じゃない。ブログを見れば、その人の行動や趣味、人柄、人間関係はある程度判るからな。でも、ブログには家庭内の問題とか、その人の心の闇や本当に隠したいことは乗せないだろ。普通」

「心の闇が大切なんですか」

「重要だな。よりその人のことが判るだろ。そして、もっとも隠したい自分の本音といったところだ。君だって、自分の持っている心の闇を他人に知られたくないだろ」

「そうですか」

彼女の心の闇。

それは、おそらく水上が関連したものだろう。

「アイドルや好きな男の子に関するものが一切ないわね」

同性愛者。レズビアン。

それが彼女にとって一番隠したいこと、心の闇なのだろうか？

そもそも、彼女が同性愛者という明確な証拠はない。

彼女は、「そうかも」と言っただけだ。

なにが違うような気がする。

机の上あった写真は、ふたつ。

中学校の頃にとったと思われる家族の写真と水上と二人で撮った写真。

顔の幼さと、背景の緑の青さから考えると両方とも2年生の春くらいだろうか。

なぜ、両方とも2年生の春なのだろうか？

高井と水上の関係であれば、高校生になってからも何枚でも二人で撮った写真はあろうに。

彼女にとっては、この時代こそが一番の時代ということだろうか。

水上に最初に彼氏が出来て死んだのが、中二の夏。

高井にとってもそれより前の時間が、一番幸せな時代ということなのだろうか。

近藤には、ふとあることが思い立った。

急いで、玄関に行く。

そして、女性物の靴を調べ始めた。

後から清水が付いて来た。

「どうしたんだ」

「母親の靴がない。ある靴は埃を被^{ほこり}った使われていない物ばかりだ。清水さん。高井の家族について調べてくれませんか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5093y/>

悪魔と契約しちゃいました

2011年12月22日03時54分発行